2017-04-18

第２回　３限

『批評理論入門』廣野由美子著　中公新書　2005 年

第１部１「冒頭」・２「ストーリーとプロット」について

大下 由佳

１「冒頭」

《キーワード》

小説の冒頭……「われわれが住む現実世界と、小説家の想像力によって生み出された世界とを分ける敷居に他ならない。」（デイヴィッド・ロッジ 1997 年 p.15）

《章の要点》

・『フランケンシュタイン』ができた時、冒頭は現在広まっているものと違った。

→現在の冒頭は手紙文で始まっている。

・小説の冒頭部は読者にとって物語世界に入り込むきっかけであり、また、多くの情報を与えられるため、負担が大きい。

→作者が執筆する際、重要とする部分である。

・『フランケンシュタイン』では、冒頭部を〈物語〉よりも現実的な〈手紙文〉にしている。

→読者を引き込みやすくし、かつこれから始まる物語に信憑性を与えている。

《概念定義・理論補足》

～

《語彙・人名・地名》

メアリー・シェリー

1797 年ロンドンで出生。誕生 10 日後に母を失う。19 歳で「フランケンシュタイン」を執筆。

パーシー・シェリー

メアリーの父の友人で、1814 年からメアリーの家に出入りしていた。

バイロン卿

詩人。『吸血鬼』の著者であり、酒好き。友人で医師のポリドリが『吸血鬼』の原型を執筆した。

エドガー・アラン・ポオ

1809 年ボストンに生まれる。詩や短編を多く発表し、著書に『タマレーンその他』、『アッシャー家の崩壊』、『構成の原理』などがある。

デイヴィッド・ロッジ

イギリスにおけるコミック・ノベルの第一人者。創作だけでなく批評の分野でも広く活動し、著書に『書くことの実践』、『構造主義を使って』などがある。

《意見・疑問》

物語の発端として、「手紙」というものがたんなる「物語」からのスタートより現実的であるということが分かった。しかし、物語の〈構造〉について他と比較しながら考えるのがこの『批評理論入門』の成すことなのだとは思うが、意味的、内容的な面において、メアリーの冒頭部の工夫にまだ納得できないところがある。果たして「手紙」を利用した導入は、本当に読者を作品に導きやすくなったのだろうか。手紙があるにしろないにしろ物語に入るために必要な情報量は変わらないし、「手紙」が冒頭に存在する意味などを読み解くため、手紙がない場合よりも処理すべき情報が増えているとも考えられる。本当に「手紙」という導入は読者のためになっているのであろうか。

また、「手紙」のほかに、文学はどのような導入形態をもつのかも気になった。

《応用可能性》

創作において「手紙」をキーワードにするのは、現実と創作の曖昧な境界線を手紙がもつために、読者を引き込むための効果的な方法なのかもしれない。また、手紙は形式ばった型（拝啓で始まるなど）が存在するために、補足説明をせずともその文体が手紙であることを想起させることが容易であると考察する。また、手紙というものはそれ自体に語りが含まれており、ときに口語体でしたためられることから、書き手の性格や口調というものも表しやすい。その点において、創作物の冒頭に手紙を用いることは、さまざまな利点があるのかもしれないと考える。

２「ストーリーとプロット」

《キーワード》
ストーリー……出来事を、起こった「時間順」に並べた物語内容である。
プロット……物語が語られる順に出来事を再編成したものを指す。
　＊両者の近似＝原始的な物語形態、お伽話など。
　　両者に差異＝小説。物語を効果的に伝えるために出来事の配列などを工夫する。
サスペンス……プロットにおいて、物語の時間的配列が組み替えられることで生じる効果。

《章の要点》
・ストーリーとプロットは文学研究において厳密に区別される。
・『フランケンシュタイン』では、物語のほぼ終わりから始まり、過去に遡る方法で語られている。
・ストーリーは時間順であるのに対し、プロットは因果関係によって物語が配列される。
・プロットでの物語の配置変更により、サスペンスが生じる効果がある。
→『フランケンシュタイン』では、諸疑問に対する答えの提示が先延ばしになることで、生まれている。

《概念定義・理論補足》(辞典、事典の順。)
フォルマリズム
・題材を棚上げにして、取り上げたテクストやオブジェの芸術的技法に焦点を合わせる批評実践のこと。内容と分離させて、作品の構造上のデザインやパターン、あるいはスタイルや様式、つまりフォルム（FORM）を強調する批評に対してしばしば軽蔑的に使われてきた。[i]
・形式的な特性を強調する芸術作品や批評方法に適用されることば。[ii]
・言語学を文学研究に援用し、文学の形式面を研究。文学における〈内容〉を、形式を生む「動因」にすぎないものとした。[iii]＊要約引用

構造主義
・基本的仮説「人間のすべての活動は自然なものでも「本質的」でもなく、構築されている（作り上げられている)」[iv]
・フェルディナン・ド・ソシュールの言語理論と、ロシアのフォルマリストらの活動により発展した運動。ソシュールのことばに「汽車を特定するものは時刻表にある旅程と停車駅であり、どの機関車や客車や貨車が連結されているかではない」がある。[v]

物語論
・物語の研究を指す。構造主義やロシア・フォルマリズムの分析方法を多く取り入れ、物語を人生や現実についての虚構による表象として扱うのではなく、形式的・組織的な構造として扱う。[vi]
・物語論研究者は、おとぎ話・神話・映画・叙事詩などを研究するが、興味はジャンルや原典の状態よりも話のはこび方にあり、時間、構成、視点、くり返されるテーマに関心を問題とする。[vii]＊要約引用

ストーリー
・テクストが生み出す様々な行為と属性から構成される命題（主語と述語からなる基本的な物語単位）を時間順につなげたもの。[viii]

プロット
・散文劇、韻文劇、物語における諸事件の順序あるいはパターンを指す。
　ストーリー、プロット、出来事の違い
　→物語や劇を糸で繋がったビーズ玉にたとえると、構成要素である「出来事」は個々のビーズ玉であり、ストーリーは糸であり、プロットはビーズ玉が糸でつながれている順序と方法である。[ix]
・物語は出来事の連続にすぎないが、プロットは「知性と記憶を要求」し、出来事の構造、語りの「論理的・知的な面」であり、「因果関係の強調」である。[x]

サスペンス
・英語では未解決、不安、気がかりの意。映画、ドラマ、小説などの物語の展開が、観客や読者に与える不安と緊張感。[xi]

《語彙・人名・地名》
E・M・フォスター
　1879 年ロンドンに生まれる。著書に『ロンゲスト・ジャ―ニ―』、『小説の諸相』、『永遠の瞬間』などがある。1970 年没。
リモン・キーナン
　ヘブライ大学教授。著書に『*Narrative Fiction*』、『*The Concept of Ambiguity*』など。

《意見・疑問》
ストーリーとプロットの差異によって物語構造が変化するということにいまさら気づき、物語を書くということがどういうことなのかようやく理解したような気がした。
プロットによる操作によって、サスペンス効果が表れていると述べられていたが、私はサスペンスだけでなくキャラクターに対する心情操作もなされているような気がした。最初

はヴィクターの視点で続くことによって怪物がただのおぞましいものであるように感じられるが、怪物の視点を過ぎたあとに見るヴィクターの心情は、極めて愚かな人物だったのだと感じ、最初ほどの同情ができなくなっていくように思うのだ。これは英米文学の授業でも、次第にヴィクターの行動に対して疑問を持つ声が多くなっていったと感じることからもうかがえた。
廣野氏が途中、フォースターの「王様が死に、そして悲しみのために王妃が死んだ」というところが、不十分であると説いている。上記の文はプロットなのだろうか。私はこの文はストーリーに過ぎないと解釈し、それの一つ手前の文、「王様が死に、それから王妃が死んだ」の文は、ストーリーでなく出来事の連鎖だと考えた。また、廣野氏の文のその後、『フランケンシュタイン』の作品にも「単純な因果関係では説明がつかない」点があり、ヴィクター自身はそれを「〈運命〉に帰している」と書かれている。プロットが「ビーズ玉が糸でつながれている順序と方法」なのであるとしたら、結びつかないビーズどうしは、別のビーズが連なった糸に足を突っ込んでいる形なのかな、と思う。以下、あまりまとまらないので別紙で検討する。
他に、『フランケンシュタイン』におけるプロットをより複雑にしたり、さらなる他視点を付け加えたりしたら、より良いものになるだろうかと思った。この作品はこの語りの量であるから、この語りの移り変わり方であるから好まれたのだろうか。仮にエピソードなどを増やしたり減らしたりしたらどうなるのだろうかと気になった。

《応用可能性》
フォースターは『小説の諸相』にて、プロットには謎がなければなりませんと説いていた。謎があってはじめてストーリーの時間が止まり、その謎に対して読者が「なぜ？」と考えるからこそ小説として面白くなるのだ、と述べている。その「なぜ？」という疑問は読者に知性がるために発せられる。ストーリーでは「それから？」という疑問（好奇心）しか発せられないのだ。フォースターはこれを書く背景として推理小説を検討しているようだったが、そのほかの分野にも応用可能だろう。例に三匹のこぶたを挙げる。原作では三匹目のこぶたがどのように家を建てたか読者に知られたのちオオカミを撃退しているが、これがどのような家のつくりかを伏せたうえで、最初にオオカミを撃退していたら、読者は「なぜ？」と思うだろう。どのように撃退したかのほかに、なぜそのような建築方法に至ったのかまでを引き延ばして語れば、読者は期待感をこめて話を読み進め、最後に謎解きをすれば、たんなるストーリーから外れたプロット、小説となり代わっていくのではないだろうか。

【参考文献】
杉野健太郎ほか共著　『コロンビア大学現代文学・文化批評用語辞典』　松柏社　1998 年
ジェニー・ストリンガー編　『オックスフォード世界英語文学大事典』　DHC　2000 年
テリー・イーグルトン　『文学とは何か―現代批評理論への招待』　岩波書店　1997 年
Janet Todd 編　『Dictionary of British Women Writers』　ROUTLEDGE London 1989 年
デイヴィッド・ロッジ　『小説の技巧』　白水社　1997 年
E.M.フォースター　『小説の諸相』　みすず書房　1994 年

【参考ウェブサイト】
Partial Answer　「from Notes on Contributors」
http://partialanswers.huji.ac.il/authors.asp?id=20　（2017.4.17 閲覧）

---

[i] 『コロンビア大学現代文学・文化批評用語辞典』p.180
[ii] 『オックスフォード世界英語文学大事典』p.830
[iii] 『文学とは何か―現代批評理論への招待』p.6
[iv] 『コロンビア大学現代文学・文化批評用語辞典』p.380
[v] 『オックスフォード世界英語文学大事典』p.330
[vi] 『コロンビア大学現代文学・文化批評用語辞典』p.281
[vii] 『オックスフォード世界英語文学大事典』p.1090
[viii] 『コロンビア大学現代文学・文化批評用語辞典』p.378
[ix] ix と同じ
[x] 『オックスフォード世界英語文学大事典』p.892
[xi] 『日本国語大辞典⑥』p.72